

日本酒

都の100年企業



①自慢の日本酒を手にする石川酒造の石川彌八郎さん(左)と田村酒造場の田村半十郎さん(右)。5日、東京都福生市で(いすれも木口慎子撮影)
②福生七夕まつりで販売される日本酒のソーダ割り



飲みやすさ

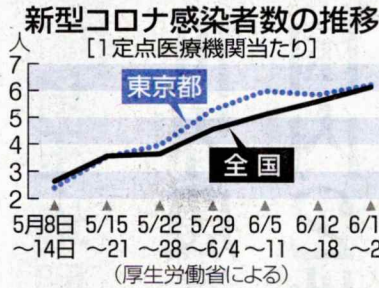
さんとのドリンクを混ぜた石川さんのおすすめの割り方は、日本酒一合(百八十三ミリ)に対して強炭酸水百ミリ。度数が高い日本酒でも飲みやすく、悪酔いもしにくい」と話す。

国税庁などによると、1973年の170万キロをピークに減少傾向をたどっている。2022年には40万キロまで落ち込んだ。若者の飲酒傾向の変化や、洋酒、ビールの人気上昇が主な要因とされている。

コロナ「第9波」入りか

5類移行2ヵ月 全国で感染拡大

新型コロナウイルスの感染が全国でじわりと拡大し、沖縄県では突出して患者が増えたことから「第九波が始まった」との見方が広がっている。感染症法上の分類が五類に移行して間もなく2ヵ月。専門家は「発熱やせきなどの症状があったら療養してほしい」と呼び掛ける。



「このまま退院者が増えなければ重症者が入院できなくなる。危機感を持っている。沖縄県の担当者はこう打ち明ける。同県では七

月二日時点の病床使用率が75.3%となり、一週前の65.7%からさらに上昇した。首都圏では「医療態勢は逼迫していない」(神奈川県担当者)ものの、感染者数は全国的に緩やかに増加している。政府にコロナ対策を助言してきた尾身茂氏は先月二十六日に「第九波が始まった可能性がある」と記者団に語り、日本医師会の釜浩敏常任理事も

再び医療逼迫への懸念が高まっている。東京都北区の「いとう王子神谷内外科クリニック」の伊藤博道院長は「コロナ患者数は(都で一日の感染者が二万人を超えた)第八波のピーク時と同じ。見えない医療崩壊が始まっている」と危機感をあらわにする。クリニックでは、六月下旬から、発熱やせきなど風邪症状を訴える患者が増加

した。診察できる人数は一日約二十人だが、今月二日にはキャンセル待ちが四十人上った。コロナの検査を受けた患者の約六割が陽性となる。これまでのコロナ患者は若年層が中心だったが、高齢者にも感染が広がりとつあるとみる。診察した八十代のコロナ患者は療養施設に入った。幼児の感染症「ヘルパンギーナ」も急拡大し、都内

では警報レベルを三週連続で超えている。小児救急が逼迫し始め、地域の医療機関から救急病院に受け入れを要請しても一〜二時間かけて入院先が見つかる状況。クリニックでは重症化を懸念し乳幼児を優先して検査や治療にあたる。「その分、若い人などの診察はできていない」とし寄せが生じている現状を語る。(渡辺真由子)

患者急増 診察追い付かず 北区の医院

五日の記者会見で「現状は第九波になっている」と述べた。新たな流行の兆しとの見方が強まっている。

釜浩氏は六日、本紙の取材に「高齢者や基礎疾患のある人など重症化リスクの高い人への配慮が必要。熱やせきが出る、検査で陽性だった場合などは療養してほしい」と語った。(望月衣瑠子、加藤益丈)